

# 陸軍第三師団軍楽隊による鶴舞公園での音楽会

## The Concerts in Tsuruma Park by the Army Third Division Military Band

丹 下 聡 子

TANGE Satoko

The aim of this study is to disclose “The Concerts in Tsuruma Park”, that is “Park Concerts” of the Army Third Division Military Band. On November 30th, 1912, a military band was newly established among the Army Third Division. “Park Concerts” was one of the activities which they did in each region and the Army Third Division took place in Tsuruma Park Sogakudo (Music hall). The previous researches of “Park Concerts” in Tokyo (Hibiya Park) and Osaka (Tennoji Park) has been revealed in detail. However, there is only little information about the contents held in Tsuruma Park, so thus the programs have not been clarified. In this paper, it is focused on both the schedule and programs of “The Concerts in Tsuruma Park”, and then tries to identify them by investigating newspaper *Nagoya Shinbun* and music magazine *Ongaku-kai* at the age of Taisho era. It is useful to examine them in order to disclose the contents of “The Concert at Tsuruma Park”.

### 0. はじめに

本研究の目的は、第三師団軍楽隊による鶴舞公園奏楽堂での音楽会、すなわち「公園奏楽」の開催内容を明らかにすることである。

1912（大正元）年11月30日に陸軍第三師団に軍楽隊が新設された<sup>1</sup>。東京以外では1888（明治21）年に設置された大阪の第四師団に次ぐものであった。「公園奏楽」は、各地の軍楽隊の活動のひとつであり、第三師団軍楽隊はそれを鶴舞公園奏楽堂で開催していた。これまでの軍楽隊によって行われた「公園奏楽」に関する研究には、東京（日比谷公園）と大阪（天王寺公園）のものがある。日比谷公園開催のものについては谷村（2010）の著書ですでに日程やプログラムなどの詳細が明らかにされている。天王寺公園で開催されたものについては塩津（2012ほか）の研究によって詳細を知ることができる。しかしながら、第三師団軍楽隊による鶴舞公園での奏楽に関する研究は見当たらず、開催内容について明らかにされていない。

本研究では、大正時代の『名古屋新聞』と音楽雑誌『音楽界』を研究対象とし、公園奏楽の日程とプログラムを拾い上げ、それらを特定する。現在、当時のプログラム原本は見つかっておらず、これらの媒体を検索していく方法が最良であると考えられる。

本稿では、これらの資料からの情報だけで全てを明らかにすることは困難なため、まず東京と大阪の「公園奏楽」についての概要を見ていく。次に、『名古屋新聞』と『音楽界』を精査することでわかった当時の軍楽隊員と開催日について述べ、最後にこの調査で明らかになったプログラムについて述べる。これらの結果を考察し、鶴舞公園での「公園奏楽」の内容を明らかにしていく。なお、引用文を除いた本文は原則的に新字体を使用している。

## 1. 軍楽隊による「公園奏楽」——東京と大阪

### 1.1. 東京：日比谷公園

1905（明治38）年に日比谷野外音楽堂が竣工された。同年8月1日付けの東京市公報で演奏会開催の告示が出されている。内容は、日比谷公園音楽堂で4月から11月まで奏楽が行われるというものであった<sup>2</sup>。第1回目は告示の当日である8月1日に開催された。午後5時から開堂式が執り行われ、続いて6時から、永井建子<sup>3</sup>指揮の陸軍戸山学校軍楽隊約50名による演奏が開始された。この日は各国公使夫妻をはじめ多くの来賓が招かれた<sup>4</sup>。

前述した東京市公報には、日比谷公園での「公園奏楽」の日程は、4月から11月までの間に毎月2回ずつ開催すること、施行日時については、通常は第2、第4日曜日の午後2時より5時まで、夏の間（7～9月）は第2、第4土曜日の午後6時より9時までとすると定められており、雨天等の場合は変更の場合があるとしている。演奏は陸軍戸山学校軍楽隊と横須賀海兵団軍楽隊が交互に行っていたが、1915（大正4）年からは三越音楽隊<sup>5</sup>も演奏することがあった。また、外国の軍楽隊が出演した記録もある。

演奏された曲目は、谷村の著書（2010）で詳細がわかる。当時の新聞や雑誌の記録にあるタイトルや作曲家名の多くは、現在の呼び名とは異なる邦訳がカタカナ表記されているため、正確に楽曲を特定するのは困難である。しかし、谷村によって整理された資料は新聞や雑誌だけではなく、プログラム原本<sup>6</sup>や当時の記録があり、その中に原語によるタイトルが書かれていたことが楽曲の正確なタイトルの特定に生かされている。現在のところ、新聞や雑誌の記録に頼るほかにない鶴舞公園での「公園奏楽」の調査において、曲目を特定するにあたり、この先行研究には大いに助けられた。「作曲者別作品等一覧<sup>7</sup>」に記されている膨大な量の作曲家、作品名を用いた演奏曲目の傾向等に関する分析については機会を改めて行いたい。

最後の「公園奏楽」は、1943（昭和18）年9月11日に海軍軍楽隊によって行われた。約40年続いたこの音楽会の最後のプログラムには「防空警報が発令の時は中止」と書かれていたという<sup>8</sup>。

### 1.2. 大阪：天王寺公園

1888（明治21）年に設置された第四師団軍楽隊<sup>9</sup>は、1912（明治45）年から「公園奏楽」を開始した。天王寺公園に奏楽堂ができたことを機に始められ、月に3回開催された<sup>10</sup>。塩津（2012）によると、この演奏会は軍楽隊主催として開催され、同隊の自主的な音楽活動として展開されてい

たという。「ミリタリー・コンサート<sup>11</sup>」と題して、曲目解説と原語表記も付いたプログラムが作成されていた。また、第四師団軍楽隊の演奏曲目については「陸軍第四師団軍楽隊の選曲傾向」として塩津（1998：43 - 80）によって報告されている。ここで報告されている曲目は天王寺公園で演奏されたものだけではないが<sup>12</sup>、これらの楽曲が第四師団軍楽隊のレパートリーになっていたと考えれば、そこで演奏された曲目の傾向も類似的であると推察される。その傾向について塩津（1998、2012）は演奏回数の多い順に 13 曲挙げている。この 13 曲の中に邦楽曲《安宅の松》《六段の調》の 2 曲が入っており「聴衆に配慮して、耳に馴染んだ“日本の曲”をプログラム中に配すことが慣例的に行われていたことに起因する」と述べている。また、「オペラ等の劇音楽<sup>13</sup>が圧倒的に多い」とも述べている。

第四師団軍楽隊は 1923（大正 12）年 3 月 31 日にワシントン軍縮条約により廃隊となったが、その後、元第四師団軍楽隊員の有志らによって大阪市音楽団が活動を開始したことが知られている<sup>14</sup>。

東京と大阪の「公園奏楽」を概観することで、プログラムの配布があったことや、東京では一年のうち 4 月から 11 月まで開催されていたことがわかった。次項ではこれらを手がかりに名古屋での「公園奏楽」の内容について明らかにしていきたい。

## 2. 鶴舞公園での「公園奏楽」——第三師団軍楽隊員と開催日

日比谷公園（東京）、天王寺公園（大阪）に続いて名古屋の鶴舞公園で最初に「公園奏楽」が開催されたのは 1915（大正 4）年 6 月 25 日であった。金曜日の夜、7 時 30 分から開始された<sup>15</sup>。この項では、創設時（1913 / 大正 2）の軍楽隊員について述べたあとに、「公園奏楽」の開催日を明らかにしていく。

### 2.1. 軍楽隊員について

名古屋市史には第三師団創設当初の隊員は東京から 10 名、大阪から 10 名、近衛師団軍楽隊から 11 名の 31 名が集められたと記録されている<sup>16</sup>。【表 1】は 1913（大正 2）年当時の軍楽隊員一覧である。同年 3 月から 12 月まで『音楽界』に掲載された「帝國音楽家住所録」から第三師団軍楽隊所属の名前を拾い上げたところ、17 名の名前がわかった。陸軍戸山学校出身者についてはその入学年月を備考欄に記載した<sup>17</sup>。戸山学校入学時の年齢は 17 歳から 20 歳<sup>18</sup>なので、入学年に 17 歳だったと仮定すると初代楽長の松波興二郎は 42 歳、一番若い藤井豊次郎は 22 歳である。この住所録から全隊員を特定することは出来なかったが、戸山学校を卒業後、年齢から推測して東京や大阪の軍楽隊で多くの演奏経験を持った隊員が集まって第三師団軍楽隊をスタートさせたことがわかる。したがって、新設の軍楽隊とは言え、高い水準の演奏を名古屋市民に提供していたと考えられる。

【表 1】第三師団軍楽隊創設時の楽隊員一覧

名前	階級	備考
松波興二郎	陸軍二等樂長從七位勳六等	戸山学校 (明治 21 年 10 月)、初代樂長
富澤學好	陸軍二等樂長從七位勳六等	戸山学校 (明治 21 年 10 月)、樂長 (大正 4-6 年)
伊藤隆一	陸軍二等樂手勳七等	戸山学校 (明治 34 年 12 月) *担当樂器はアルト・ホルン
竹中房吉	陸軍二等樂手勳七等	
堤正己	陸軍二等樂手	
栗原直吉	陸軍二等樂手	戸山学校 (明治 38 年 12 月)
岡田四郎	陸軍二等樂手	戸山学校 (明治 38 年 12 月)
柳橋惇	陸軍二等樂手	戸山学校 (明治 35 年 2 月)
鯉田悦次	陸軍二等樂手	戸山学校 (明治 37 年 12 月) *戸山学校の名簿は「謙次」
金子外茂雄	陸軍三等樂手	戸山学校 (明治 39 年 12 月)
蟹江儀之助	陸軍三等樂手	戸山学校 (明治 40 年 12 月) *戸山学校の名簿は「蟹井」
八木宗松	陸軍三等樂手	戸山学校 (明治 40 年 12 月)
松本昌夫	陸軍三等樂手	戸山学校 (明治 40 年 12 月)
松野仙吉	陸軍三等樂手	
藤井豊次郎	陸軍三等樂手	戸山学校 (明治 41 年 2 月) *戸山学校の名簿は「豊三郎」
荒川誓海	陸軍三等樂手	戸山学校 (明治 40 年 12 月) *担当樂器はバリトン・サクソ
佐伯一郎	陸軍三等樂手	戸山学校 (明治 40 年 12 月) *大正 12 年除隊。除隊時一等樂手

## 2.2. 開催日

これまで、鶴舞公園での「公園奏楽」が開催された全日程は明らかにされていない。本研究では、愛知県立芸術大学図書館ホームページの「大正期『名古屋新聞』音楽記事索引<sup>19)</sup>」を利用し、「公園奏楽」に関する記事を検索した。『名古屋新聞』に全ての演奏会が掲載されてはいなかったため、大正時代の『音楽界』も参照した。さらに同時期の『新愛知』も調べた。

【表 2】は現在判明している「公園奏楽」の日時、それを確認した新聞の日付と雑誌の号数、曲目の有無を示したものである。前項で見たように、東京では月に 2 回行われていたことがわかっている。また、『音楽界』には「鶴舞公園での軍楽隊による奏楽は月に 3、4 回あった<sup>20)</sup>」という記述もあるため記事を見落としている可能性もある。『名古屋新聞』、雑誌『音楽界』、新聞『新愛知』での記載情報について以下に述べる。

### ①『名古屋新聞<sup>21)</sup>』

第 1 回目 (1915 (大正 4) 年 6 月 25 日) の開催について、その当日に記事が掲載されたのをはじめ、「公演奏楽」に関する多数の記録が残っている。たいていは、前日または当日の朝に「公園奏楽」が開催される旨が伝えられ、開催日、開演と終了の時間、プログラムが発表されている。また、翌日にその演奏会の様子が伝えられることもあった。1916 (大正 5) 年 5 月 7 日の紙面には「今年初めての公園の奏楽會 (ママ)」と題して前日の様子を伝える記事が写真とともに掲載されていた。しかしながら、【表 2】にあるように、その前月 (4 月 22 日) にも「公園奏楽」が開催されたと『音楽界』

では伝えている。『名古屋新聞』では特に名古屋市主催の「第三師団軍楽隊送別演奏会」について10日ほど前から繰り返し宣伝の記事が掲載され、軍楽隊の解散を惜しむ様子が伝わってくる。

【表2】鶴舞公園「公園奏楽」開催日一覧

公園奏楽日時				掲載場所/日付・号			備考	
年	月日	曜日	開演時間	名古屋新聞	音楽界	新愛知	プログラム	その他
1915 (大正4)	6月25日	金	午後7時半	当日	166		○	
	7月10日	土	午後7時	7/9,11			○	翌日講評で「今年始めて」と伝えている
	9月11日	土	未確認	当日			×	案内のみ
1916 (大正5)	4月22日	土	午後2時		176		○	
	5月6日	土	未確認	当日,5/7			○	翌日講評あり
	5月27日	土	午後2時	当日			○	
	6月25日	日	午後7時半	当日			○	
	7月16日	日	午後7時半	7/13,15			○	
	8月19日	土	午後7時半	8月17日			○	
	8月31日	木	午後7時	8月30日			○	
	9月10日	日	午後7時	当日			○	
	9月23日	土	午後6時	9月21日			○	
1917 (大正6)	4月8日	日	午後2時	4月7日			○	楽員の異動について
	6月26日	火	午後7時半	6月23日			○	
	7月7日	土	午後7時半	当日			○	
	10月14日	日	未確認	当日			×	案内のみ
1918 (大正7)	6月8日	土	午後7時	6月7日			○	「ゲノーを偲ぶ」
	6月25日	火	未確認	6月23日			○	
	7月12日	金	午後7時半	当日			○	
1919 (大正8)	4月3日	木	午後2時	4月2日			○	
	4月13日	日	午後2時	4月12日			○	
	6月7日	土	午後7時		214		○	
	7月26日	土	午後7時半		215		○	
	8月10日	日	米騒動のため中止					
1920 (大正9)	4月25日	日	午後2時		224		×	
	5月2日	日	午後2時	当日	224		×	
	5月16日	日	午後2時	○	224		×	
	6月5日	土	午後7時		224		×	
	6月26日	土	午後7時	○	224		×	
	7月3日	土	午後7時		224		×	
	7月17日	土	午後7時		224		×	
	7月24日	土	午後7時	当日	224		×	
	8月7日	土	午後7時		224,227		○	227にプログラムあり
	8月14日	土	午後7時		224,227		○	227にプログラムあり
	8月29日	日	午後7時		224		×	
9月11日	土	午後7時		224		×		
9月25日	土	午後7時		224		×	25日は中止。26日へ延期(名古屋新聞9/25)	
10月21日	木	午後2時		224		×		
1921 (大正10)	5月15日	日	午後2時	5月14日	238		○	杉本楽長の話あり
	6月25日	土	午後7時	6月24日			○	
	7月16日	土	夜	7月15日			○	
	7月23日	土	午後7時半	○	240		○	
	8月6日	土	午後7時半		240		○	
9月24日	土	午後7時		241		○		
1922 (大正11)	3月28日	火	午後3時	3/19,20,23-26			○	名古屋市主催 「第三師団軍楽隊送別演奏会」
	4月1日	土	午後2時			3/31,4/1	○	第三師団軍楽隊員一同主催

②『音楽界<sup>23</sup>』

『名古屋新聞』だけでは十分な情報が得られなかったため、当時の音楽雑誌である『音楽界』も精査した。日本各地で開かれた演奏会の情報欄「地方楽況」などで鶴舞公園での「公園奏楽」に関する記事を確認することができた。内容は、開催された日時とプログラムである。また、1920（大正9）年6月224号にはこの年の開催スケジュールが書かれていた。これについては後で述べる。

③『新愛知<sup>24</sup>』

「公園奏楽」に関する記事は、第三師団軍楽隊最後の演奏会となった軍楽隊員主催による演奏会についての記事のみ確認できた。

以上のほかに、新聞には掲載されていなかったが、1918（大正7）年8月10日は米騒動により「公園奏楽」が中止されていることがわかっている<sup>25</sup>。新聞、雑誌から得た開催日の情報は断片的で、定期的に行われていたという裏付けにはならなかったが、②で述べたように『音楽界』で1920（大正9）年の開催スケジュールが記載されていた。これについて、次項で見ていく。

2.3. 大正9年（1920）の開催スケジュール

1920（大正9）年6月の『音楽界』には「第三師団軍楽隊が四月二十五日の日曜日から以後五ヶ月の期間中を左記日割に依つて奏楽することに決定第一回（廿五日）は午後二時より四時迄の二時間で曲目は（中略）是に依つて愈々同公園の散策シーズンに入りませうが夜間に於ける奏楽は六月五日の土曜日から九月二十五日の土曜日迄に限られました（本文ママ）」と記載されている。【表3】はそこに書かれている「奏楽開催日割一覧」を表にしたものである。この一覧を見ることで新聞や雑誌からの記録だけではわからなかった開催期間が明らかになった。

【表3】大正9年（1920）のスケジュール

月	日	曜日	開演時間	
4月	25日	第4日	午後2時	昼
5月	2日	第1日	午後2時	昼
	16日	第3日	午後2時	昼
6月	5日	第1土	午後7時	夜
	26日	第4土	午後7時	夜
7月	3日	第1土	午後7時	夜
	17日	第3土	午後7時	夜
	24日	第4土	午後7時	夜
8月	7日	第1土	午後7時	夜
	14日	第2土	午後7時	夜
	29日	第5日	午後7時	夜
9月	11日	第2土	午後7時	夜
	25日	第4土	午後7時	夜
10月	21日	第3木	午後2時	昼

次に、開催期間等を日比谷公園の奏楽と比較しながら以下に述べる。【表4】は、日比谷公園、鶴舞公園の開催概要を比較する表である。まず、開催期間は鶴舞公園の方が1ヶ月早く終了している。夏の間は夜公演であることはどちらも同じだが、演奏時間は鶴舞公園の方が短く、6月と9月は2時間、7月と8月は2時間半の演奏会であった。日比谷公園での奏楽が第2、第4週目と決められているのに対し、鶴舞公園では規則性がなかった。また、曜日についてもたいてい土曜日から日曜日の開催であるものの、ほかの曜日に行われることもあった。第三師団軍楽隊の「公園奏楽」演奏スケジュールは、ほかの行事などの日程を考慮しながら年間スケジュールが決められていたことが窺える記事が1916（大正5）年4月10日に掲載されていた<sup>26</sup>。また、日比谷公園での奏楽は陸海軍

の二つの軍楽隊が交互に行っていたが、鶴舞公園では第三師団軍楽隊のみで行われているため、規則的に開催するのは困難だったという理由もあろう。

【表 4】 日比谷公園と鶴舞公園の開催概要比較

	期間	時間			日程の規則性	演奏
		昼	夜			
日比谷公園	4月～11月	日曜日の2時～5時	土曜日の6時～9時		あり *第2、第4週目	陸軍戸山学校軍楽隊と横須賀海兵団軍楽隊が交互に行った
		4,5,6,10,11月	7,8,9月			
鶴舞公園	4月～10月	2時～4時	7時～9時	7時～9時半	なし	第三師団軍楽隊
		4,5,10月	6,9月	7,8月		

以上に述べたように、年によってスケジュールが異なっていた可能性はあるが、鶴舞公園でも「公園奏楽」が定期的に行われていたことがわかった。次に演奏されていたプログラムについて述べる。

### 3. 鶴舞公園の奏楽プログラム

本項では、第三師団軍楽隊によって演奏されていた「公園奏楽」でのプログラムについて見ていく。まず、曲目のジャンルとそれぞれの曲目タイトルについて述べ、演奏曲目の傾向について考察する。

#### 3.1. 演奏曲目のジャンル

『名古屋新聞』や『音楽界』に掲載されているプログラムには曲のタイトルの前にジャンル名が付けられていた。【表 5】は、演奏会日時と演奏されたジャンルの一覧である。ジャンルは「行進曲」「序曲」「歌劇」「舞曲」「邦楽」「特奏曲」「接続曲<sup>27</sup>」「帝国青年の歌・名古屋市歌・君が代」「その他」の9つに分けた。

これらのほかに「抜粋曲」「意想曲」「組曲」「神劇」「総合曲」「交響楽」もあった。「抜粋曲」は確認したものすべてが「歌劇」ジャンルに入る作品だったのでそこに組み入れた。それ以外は「その他」として備考欄に記入した。

「特奏曲」は、例えば「ピッコロ特奏」のように書かれており、協奏曲のことだと考えられる。「特奏曲」が演奏されているときは備考欄に独奏楽器を記入した。

「帝国青年の歌・名古屋市歌・君が代」の欄にはその日に演奏された曲目を「帝国青年の歌」は「帝」、「名古屋市歌」は「名」、「君が代」は「君」と省略して記入した。備考欄の「」内は新聞に書かれていた記事である。

【表5】演奏ジャンル一覧

演奏会日時		行進曲	序曲	歌劇	舞曲	邦楽	特奏曲	接続曲	帝国青年の歌 名古屋市歌 君が代	その他	備考
年	月日										
1915 (大正4)	6月25日	○	○	○	○	○	○				クラリネット
	7月10日	○	○	○	○	○					意想曲
1916 (大正5)	4月22日	○	○	○	○	○					意想曲
	5月27日	○	○	○	○	○		○			
	6月25日	○	○	○	○	○		○			
	7月16日	○	○	○	○	○					
	8月19日	○	○	○	○	○		○			
	8月31日	○	○	○	○	○					
1917 (大正6)	9月23日	○	○	○	○	○					意想曲
	4月8日	○	○	○	○	○					
1918 (大正7)	6月26日	○	○	○	○	○	○		名		クラリネット、トロンボーン
	7月7日	○	○	○	○	○	○				ホルネット、組曲
1919 (大正8)	6月8日		○	○	○	○			帝		「グノーを偲ぶ」
	6月25日	○	○	○	○	○	○	○	帝		ピッコロ
	7月12日	○	○	○	○	○			帝		
1920 (大正9)	4月3日	○	○	○	○	○		○	名・帝		「市歌と青年歌の合唱を希む」
	4月13日	○	○	○	○	○		○	君		「市歌と青年歌の合唱を希む」
	6月7日	○	○	○	○	○	○				ピッコロ
1921 (大正10)	7月26日	○	○	○	○	○		○	帝		
	5月2日	○	○	○	○	○		○	君		
	5月16日	○	○	○	○	○		○	君		
	6月26日	○	○	○	○	○		○		○	描写楽、総合曲
	7月24日	○	○	○	○	○		○		○	神劇
1922 (大正11)	8月7日	○	○	○	○	○	○		君		ピッコロ
	8月14日	○	○	○	○	○			君	○	聖楽、幻想曲
	5月15日	○	○	○	○	○					
	6月25日	○	○	○	○	○		○		○	神劇
	7月16日		○	○	○					○	総合曲
1923 (大正12)	7月23日	○		○	○		○	○		○	アルト・サクソフォーン
	8月6日	○	○	○	○		○	○			クラリネット
	9月24日		○	○	○						
1924 (大正13)	3月28日	○	○	○	○		○		名・君		ホルネット二重奏、組曲
	4月1日		○	○	○				名・君	○	組曲、交響楽

### 3.2. 曲目のタイトル

次にジャンルごとに曲目のタイトルを見ていく。ここにすべてのタイトルを掲載することはできないので3回以上(「接続曲」「その他」は2回)演奏されているものを【表6】に示す。表の左にある数字はそれぞれ、①「行進曲」、②「序曲<sup>28)</sup>」、③「歌劇」、④「舞曲」、⑤「邦楽<sup>29)</sup>」、⑥「接続曲」、⑦「特奏曲」、⑧「その他」である。作曲家名、生没年、作曲家の国名<sup>30)</sup>に続いて曲名と確認された演奏回数を記入した。これらは谷村(2010)の著書を参照し、作曲家名などは現代の呼び名を採用している。

【表6】 曲目タイトル

	作曲家名	原語	生没年	国	曲目	回数
①	スーザ	Sousa, John Philip	1854-1932	米	行進曲『美中の美』The Fairest of the Fair, March	3
	チャイコフスキー	Tchaikovsky, Peter Ilyich	1840-1893	露	『スラブ行進曲』March Slav	3
②	ヴィオロ	Violot		仏	序曲『アポロンの神』 Appollon, ouverture fantaisie	3
	ボワルヂュー	Boieldieu, François-Adrien	1775- 1834	仏	序曲『白衣の婦人』La dame blanche, ouverture	3
③	ロッシーニ	Rossini, Gioachino Antonio	1792-1868	伊	『ウィリアム・テル』序曲 Guillaume Tell, Overture	3
	ヴェルディ	Verdi, Giuseppe	1813-1901	伊	『アイーダ』Aida	5
④	ヴェルディ	Verdi, Giuseppe	1813-1901	伊	『椿姫』La Traviata	3
	グノー	Gounod, Charles	1818-1893	仏	『ミレイユ』幻想曲 Mireille, grande fantaisie	3
⑤	グノー	Gounod, Charles	1818-1893	仏	『ファウスト』幻想曲、抜粋曲 Faust, fantaisie/sélection	4
	サン＝サーンス	Saint-Saëns, Camille	1835-1921	仏	『サムソンとダリラ』Samson et Dalila, sélection	3
⑥	シュトラウス、O	Straus, Oscar	1870-1954	奥	『チョコレートの兵士』 Der tapfere Soldat, Potpourri	3
	ドリーブ	Delibes, Léo	1836-1891	仏	『ラクメ』Lakmé	3
⑦	ベルリオーズ	Berlioz, Hector	1803-1869	仏	『ファウストの劫罰』La damnation de Faust	3
	ロッシーニ	Rossini, Gioachino Antonio	1792-1868	伊	『セビリアの理髪師』Il barbiere di Siviglia	5
⑧	ワーグナー	Wagner, Richard	1813-1883	独	『ローエングリン』抜粋 Lohengrin, Potpourri	3
	ワーグナー	Wagner, Richard	1813-1883	独	『タンホイザー』Tannhäuser	4
⑨	メイユール	Mayeur, Louis	1837-1894	白	円舞曲『巴里の謝肉祭』Le carnaval à Paris, valse	3
	レハール	Lehár, Jr., Frantz	1870-1948	ボ	円舞曲『金と銀』Gold and Silver, Walzer	5
⑩	大沼哲	Onuma, Satoru	1889-1944	日	長唄『老松』Oimatsu, Nagauta	4
	四世 杵屋六三郎	Kineyarokusaburo IV	1779-1855	日	長唄『勸進帳』Nagauta, Kanjin-chio	3
⑪	永井建子	Kenshi, Nagai	1865-1940	日	長唄(常磐津)『老松』 Oimatsu, Nagauta(Tokiwazu), Air Japonais	4
	初世 富士田吉治、藤間勘左衛門	Fujita Kichiji I and Fujima Kanzaemon	1714?-1771 (富士田)	日	長唄『安宅の松』Nagauta, Ataka no Matsu	4
⑫	八橋検校	Yatsuhashi Kengyo	1614-1685	日	『箏曲六段』Sokyoku, Roku-dan	3
	吉本光蔵	Yoshimoto, Mitsuzo	1863-1907	日	長唄『越後獅子』Echigo-Jishi, Nagauta	3
⑬	ゴッドフレアー編	Godfrey, Adolphus Frederick	1837-1882	英	『英国の回想』 Reminiscences of England, Selection	2
	ダグラス編	Douglas Shipley	1868-1920	英	『学生歌集』Students Song, Fantasy	2
⑭	ダマレ	Damaré, Eugéne	1840-1919	仏	ポルカ『鶴鶴の歌(ミソサザイ)』 The Wren Polka (Piccolo solo)	4
	アマース	Amers, Harry G.	1878-1951	英	『ハイランド・パトロール』 The Wee MacGregor, Highland Patrol	2
⑮	セレン尼克	Sellenick, Adolphe Valentin	1826-1893	仏	意想曲『長閑けく廻る公園の水車』 Le joyeux moulin de parc, idyll	2
	ハイドン	Haydn, Franz Joseph	1732-1809	奥	『天地創造』Die Schöpfung, Oratorio	2
⑯	ブカロッシー	Bucalossi, Procida	1832?-1918	伊	『狩りのスケッチ』A Huntiong Scene, Descriptive	2

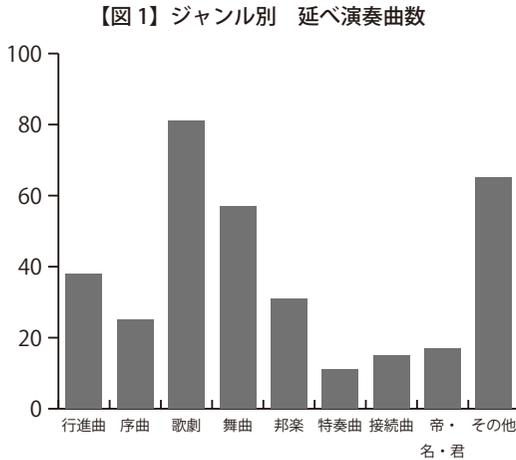
【表6】からは、特に「歌劇」と「邦楽」の演奏が多いことが読み取れる。ここまでで「公園演奏」で演奏された曲のジャンルと主な演奏曲目がわかった。これらをもとに、次項ではプログラムの傾向を明らかにしていく。

### 3.3. プログラムの傾向

ここでは、今回確認された曲をジャンルごとに、延べ演奏曲数と国別の作曲家数をグラフで示し、それらを考察する。

①演奏曲数による傾向の分析

【図1】はジャンルごとの演奏曲数をグラフにしたものである。確認できた延べ演奏曲数<sup>31</sup>は340曲であった。内訳は「行進曲」38、「序曲」25、「歌劇」81、「舞曲」57、「邦楽」31、「特奏曲」



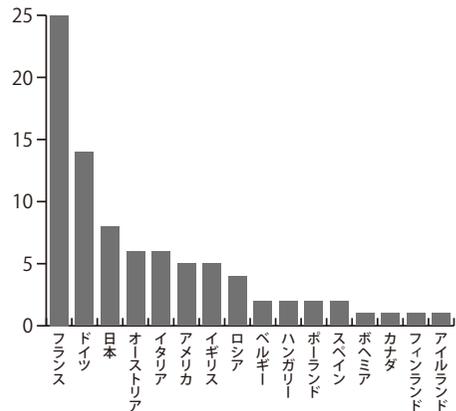
11、「接続曲」15、「帝国青年の歌・名古屋市歌・君が代」17、「その他」65で、グラフを見てもわかるように「歌劇」が一番多く演奏されている。「序曲」と「舞曲」は別のジャンルとして曲数を数えているが、それらはオペラの中の「序曲」や「舞曲」も含まれているということまで考慮すると「歌劇」の演奏回数が圧倒的に多いことがわかる。このことは、塩津（2012）によって第四師団軍楽隊の演奏曲目のなかでも「オペ

ラ、オペレッタ、ミュージカル等の劇音楽が圧倒的に多い」と報告されている内容とほぼ一致する<sup>32</sup>。「行進曲」は数回を除いてプログラムの1曲目に必ず演奏されているため「歌劇」「舞曲」に次いで演奏回数が多い。特筆すべきは「邦楽」の31回という演奏回数である。日比谷公園での演奏回数を見ると1905（明治38）年から1944（昭和19）年までの約40年の間に48回演奏されており、その内、鶴舞公園で「公園奏楽」行われていた期間に演奏されたのは15回であった。1916（大正5）年4月10日の『名古屋新聞』には「軍楽の音 只好の名古屋人西洋樂は解せぬ（ママ）」という見出しで、無料である公園奏楽には多くの聴衆が集まるが《越後獅子》や《勸進帳》のような長唄をプログラムに入れないと喜ばれないという旨を富澤楽長が語っている。このことと鶴舞公園での邦楽演奏回数について考察すると、「邦楽」がプログラムの中に積極的に組み込まれているのは鶴舞公園での「公園奏楽」プログラムの特色のひとつと言えるだろう<sup>33</sup>。

②国別作曲家数による傾向の分析

【図2】のグラフは国別の作曲家数をグラフにしたものである。内訳は、フランス（25）、ドイツ（14）、日本（8）、オーストリア、イタリア（各6）、アメリカ、イギリス（各5）、ロシア（4）、ベルギー、ハンガリー、ポーランド、スペイン（各2）、ボヘミア、カナダ、フィンランド、アイルランド（各1）となっており、様々な国の作曲家の作品が演奏されていたことがわかる。まず、フランスの作曲家が圧倒的に多いのは陸軍軍楽隊の教官がフランス

【図2】国別 作曲家数



人のルルーであったことなどが影響しているということで間違いないだろう<sup>35</sup>。フランス人作曲家を見ると現在はほとんど知られていない人物も名を連ねていることが特徴である<sup>36</sup>。ルルーが来日する前のフランスで度々演奏されていた曲も含まれていると考えられる。しかしながら、フランスの作曲家が多いからと安易に「フランスの作品が多かった」と結論付けることはできない。その理由として例えば「行進曲」ではスーザ（アメリカ）の作品<sup>37</sup>が取り複数曲取り上げられているし、「歌劇」ではヴェルディやロッシニ（ともにイタリア）の作品<sup>38</sup>が多く演奏されていることからわかるように、作曲家の数と演奏回数と同じではないからである。

ここではジャンル別の分析と同様に、この国別作曲家の分析の結果も塩津（2012）が報告しているものとほぼ一致していることがわかった<sup>39</sup>。

#### 4. おわりに

本研究により、第三師団軍楽隊による鶴舞公園の「公園奏楽」の内容が明らかになった。しかしながら、詳細を明らかにするためにはまだいくつかの課題が残されている。まず、全日程が明らかになっていないことである。さらに新聞を精査する必要もあるが、他の媒体についての調査も検討したい。なぜならば、当時の新聞では皇族の動静や戦争関連の情報が大きく取り上げられると「公園奏楽」のように小さな記事は掲載されなかったということも考えられるためである。また、東京と大阪では「公園奏楽」でプログラムが配布されていたことがわかった。名古屋でも配布されていた可能性は高いのでこれも続けて調査したい。その他、新聞等で確認した曲目についてまだいくつか正確な作曲者名、曲名がわかっていないものがある。これについても調査を進め、本稿では掲載できなかった曲目もあわせて整理することが今後の課題である。

---

## 主要参考文献

### ・書籍

新修名古屋市史編集委員会 2000『新修名古屋市史第六巻』愛知：名古屋市。  
谷村政次郎 2010『日比谷公園音楽堂のプログラム—日本吹奏楽史に輝く軍楽隊の記録—』東京：つくばね舎。  
戸楽会 1987『陸軍軍楽隊員名簿』非売品。  
中村理平 1993『洋楽導入者の軌跡—日本近代洋楽史序説』東京：刀水書房。  
名古屋市蓬左文庫編集・発行 2018『米騒動絵巻—描かれた大正の名古屋』愛知。  
山口常光編著 1968『陸軍軍楽隊史—吹奏楽物語』東京：三書社。

### ・論文

塩津洋子 1998「陸軍第四師団軍楽隊の選曲傾向」『音楽研究』(14) pp. 43 - 80、大阪音楽大学音楽博物館。  
塩津洋子 2012「関西吹奏楽の祖 陸軍第四師団軍楽隊」『音楽研究』(28) pp. 1 - 18、大阪音楽大学音楽博物館。  
塚原康子 2001「軍楽隊と戦前の大衆音楽」『プラスバンドの社会史—軍楽隊から歌伴へ』pp. 83-124、東京：青弓社。

### ・雑誌

『音楽界』大正2年(1913)～大正12年(1923)。

### ・新聞

『新愛知』大正2年(1913)～大正11年(1922)  
『名古屋新聞』大正2年(1913)～大正11年(1922)

---

## 参考URL

Bibliothèque nationale de France « Digital Libraries - Gallica » <https://gallica.bnf.fr/> (アクセス日 2018年11月5日)。  
『愛知県立芸術大学 芸術情報センター図書館 (大正期『名古屋新聞』音楽記事索引試行版)』<http://aigei-library.blogspot.com/p/kjisakuin.html> (アクセス日 2018年10月20日)。  
『中日新聞 (社史・沿革)』<http://www.chunichi.co.jp/info/enkaku.html> (アクセス日 2018年10月15日)。

---

## 註

- <sup>1</sup>『官報』第103号、p.77。第三師団は名古屋城の南東、外堀町(現在の三の丸一丁目)にあった。
- <sup>2</sup>「日比谷公園音楽堂奏楽日時ノ件 東京市告示第六十二號」(谷村 2010 : 13)。
- <sup>3</sup>永井建子(1865 - 1940) 明治35年(1902)から翌年までフランスへ留学した。後に第6代楽長となる(戸楽会 1987 : 5)。
- <sup>4</sup>谷村 2010 : 13。
- <sup>5</sup>1909(明治42)年に三越が広告宣伝のために設立した少年音楽隊である(塚原 201 : 111)。
- <sup>6</sup>「陸軍々楽隊では永井楽長が原書を翻訳して自ら聴衆たちに楽曲の筋を印刷して配布するという熱の入れ方で、これがまた非常に喜ばれ、あるファンのごときは、そのプログラムを毎回保存している人もいるくらいであった」(山口 1968 : 118)。この文章からプログラムの内容が詳細であったことがわかる。
- <sup>7</sup>谷村 2010 : 308 - 363。
- <sup>8</sup>谷村 2010 : 376。
- <sup>9</sup>3月6日に大阪鎮台付第三軍楽隊として設置されたが、同年5月12日に「師団司令部條例」(勅27)制定により、第三軍楽隊は第四師団軍楽隊と改称された(谷村 2010 : 369)。
- <sup>10</sup>塩津 2012 : 11。
- <sup>11</sup>日比谷公園奏楽のプログラム(明治39年<1906>10月14日分)にもドイツ語で“Militär - Konzert”と書かれていた(谷村 2010 : 14)。
- <sup>12</sup>「第四師団軍楽隊の演奏の場は、実に多種・広範囲に及んでいる。軍隊に所属する団体としての公務のほか、一般社会での活動も盛んに行われた。例えば、要人の歓送迎会、建築物の開所式、民間会社の懇親会、居留地の外国人の舞踏会、博覧会、学校の運動会などへの出張演奏は枚挙にいとまがない」(塩津 1998 : 45)。

- <sup>13</sup>G. ロッシーニ (1792 - 1868) 《ウィリアムテル》、G. ビゼー (1838 - 1875) 《カルメン》ほか。
- <sup>14</sup>谷村 2010 : 373。
- <sup>15</sup>1914 (大正 3) 年は日比谷でも一度も開催されていない。昭憲皇太后崩御 (大正 3 年 4 月 11 日) のためである。(谷村 2010 : 13)
- <sup>16</sup>新修名古屋市史編集委員会 2000 : 491。1912 (大正 1) 年 11 月 19 日付の『名古屋新聞』では「隊員約五十名は廿九日に東京、大阪の両軍楽隊より来名」と伝えている。
- <sup>17</sup>戸楽会 1987 を参照した。
- <sup>18</sup>1906 (明治 39) 年に「軍楽生徒召募に関する意見書」が永井建子楽長によって提出された。翌年にはこの上申書が認められ、生徒の召募は 16 歳から 19 歳となっている。
- <sup>19</sup>愛知県立芸術大学「鈴木政吉」プロジェクトチームのもと、大正年間に『名古屋新聞』に掲載された音楽記事を集め、その索引をリスト化したものである。
- <sup>20</sup>『音楽界』256 : 45。
- <sup>21</sup>1906 (明治 39) 年に創刊された。『新愛知』と合併後、『中日新聞』となる。
- <sup>22</sup>『音楽界』176 号の記事 (p.55) には「公園音楽會」と題してプログラムも掲載しているが場所の記載はない。しかしながら、「地方楽況」のページであることと、指揮者が軍楽隊長の富澤好學であることから第三師団軍楽隊の鶴舞公園での「公園奏楽」のことだと考えられる。
- <sup>23</sup>1 巻 1 号は 1908 (明治 41) 年 1 月に発行されている。大正時代の音楽雑誌である。
- <sup>24</sup>1888 (明治 21) 年に創刊された。のちに『名古屋新聞』と合併する。
- <sup>25</sup>名古屋市蓬左文庫 2018 : 5, 26。
- <sup>26</sup>富澤楽長の話として「四月の中頃から時々公園の奏樂堂で御聞せすることになるだらうが市役所の方が未だ具体的に確定しないから期日などは判然しない (本文ママ)」と掲載されている。『名古屋新聞』1916 (大正 5) 年 4 月 10 日。
- <sup>27</sup>塩津は「作曲者の様々な曲から有名な旋律を抜き出してメドレー形式にまとめた、いわば作曲者のダイジェスト版のようなものである」と述べている (塩津 1998 : 70)。
- <sup>28</sup>作曲家名「ヴィオロ」は谷村 (2010) で生没年と国の確認が出来なかったためフランス国立図書館のデジタルアーカイブ「Gallica」を参照した。その結果、19 世紀の新聞記事からこの曲が演奏された記録が検索されたが、ファーストネームと生没年を知ることはできなかった。掲載されていた新聞は *Le XIXe siècle* 1893.8.21、*L'Avenir du bassin d'Arcachon* 1902.12.21 であった。
- <sup>29</sup>編曲者がわかっているものは編曲者名を記載した。
- <sup>30</sup>国名の省略は以下の通りである。「米」=アメリカ、「露」=ロシア、「仏」=フランス、「伊」=イタリア、「奥」=オーストリア、「独」=ドイツ、「白」=ベルギー、「ボ」=ボヘミア、「日」=日本。
- <sup>31</sup>同じ曲が演奏されている場合も 1 回演奏するごとに 1 曲と数えた。
- <sup>32</sup>塩津 1998 : 69。
- <sup>33</sup>『陸軍軍楽隊史』の中で田辺尚雄は野外音楽堂での演奏会の曲目について「第四師団の軍楽隊は日本の俗曲を編曲して多く演奏した (中略) 学校で教えるものは西洋風の唱歌や軍歌に限られていた。それ故われわれが俗曲に接する機会は、この軍楽隊の演奏が主なるものであった」(山口 1968 : 60) と述べている。俗曲とは《越後獅子》《勸進帳》などであり、このことから第四師団も邦楽を多数演奏していたことが窺えるため邦楽が多いのは名古屋に限ったことではないであろう。また、邦楽の演奏が当時の学校音楽教育の内容も影響していた可能性があることは興味深い。
- <sup>34</sup>シャルル・ルルー Charles Leroux (1851-1926)。1884 (明治 17) 年から 1889 (明治 22) 年まで陸軍軍楽隊の教官であった。1888 (明治 21) 年には第四師団軍楽隊とともに大阪、奈良等を訪問している (中村 1993 : 634 - 635)。
- <sup>35</sup>陸軍軍楽隊からフランスへの留学者もいた。古矢弘政、工藤貞次が 1882 (明治 15) 年から 7 年間パリ音楽院に留学ほか (塚原 2001 : 97)。
- <sup>36</sup>これらの作曲家名を「Gallica」で検索したところ、その楽譜などが確認された。
- <sup>37</sup>【表 6】で示した《美中の美》のほかに《星条旗よ永遠なれ》《士官候補生》などがある。
- <sup>38</sup>【表 6】で示した作品のほかにヴェルディ《イル・トロヴァトーレ》《リゴレット》、ロッシーニ《セビリアの理髪師》《セミラミデ》などがある。
- <sup>39</sup>第四師団軍楽隊で演奏された曲の作曲家を国別に見ると「上位からフランスが 29 人、ドイツが 21 人、アメリカが 16 人、オーストリアが 12 人」と続いている (塩津 2012 : 10)。

